

二度目のアスベストショック

昨年12月の訪問の際は元松橋町町会議員の右山氏に、3月の訪問の際は宇城市市議会議員の高木氏に協力いただいた。高木氏は、元町(市)職員で、保健予防課に長く在籍した方で、松橋町における住民健診の中心的役割を担ってきた方である。

松橋町は熊本県の補助が終了して以降も、個人負担のない精密検査を継続し、胸膜病変の疑いがある住民についてはCT検査も実施したことは特筆すべき点である。庁内でも様々な苦労があったそうである。そして、住民健診と健康管理システム登録を一体化するため、新たなソフトを開発し、登録者の経過観察を行っていたのである。その後、2004(平成16)年に保守契約(年間70万円)が切れ、翌年の合併により宇城市となり、新たな行政システムとして運用されることになった。ところが登録項目の不備や統計資料の不具合が判明し、他の健康診断との連携が求められていた。

そうした中で2005(平成17)年のクボタショックを迎えたのであった。同年9月、熊本県はクボタショック報道を受け、中皮腫2名と石綿肺3名が死亡し労災認定を受けていたことを発表した。高木氏は、「松橋町民にとっては、二度目のアスベストショックであった」と語られた。

高木氏から提供していただいた資料によると、2004年度末時点の健康管理システムに登録さ

れている市民数(累計)は、1,617人となっている。1988年の初回の健診以降に亡くなられた方が415人、転出者が50名で、クボタショック時点での実質的な登録者は1,152名であった。凄まじいと言えない数である。

2005年末には、地元住民を対象とした無料相談会が松橋町で開催され、宇城市による「アスベストに関する健康問題について」の地域説明会も開催された。しかし、地元の反応は「もうよか」であったと語られた。熊本県民として、水俣病と向き合ってきたが故に漏れた言葉なのだろうか。

最初に相談を受けた女性の胸部画像を専門医が読影したところ、ハッキリとわかる胸膜プラー

クが写っているが石綿肺の傾向はなかった。だが、彼女の父親は麻生石綿で働き、肺がんで亡くなっている。彼女の母親も麻生石綿で働き、石綿肺が疑われている。しかし、労災申請は行われていない。

患者と家族の会の関西支部の会員には、元松橋町の住民で、悪性胸膜中皮腫とびまん性胸膜肥厚を発症した2名の女性がおられる。松橋町(元住民)には、まだまだ被害が埋もれている気がする。

二度のアスベストショックを経験した松橋の事実を知ってほしい。



(ひょうご労働安全衛生センター
西山和宏)

県内初のアスベスト国賠訴訟提訴

静岡●耐熱パイプ等製造で中皮腫

悪性胸膜中皮腫と診断された静岡のAさんの奥さんから初めて電話相談を受けたのは、2004年2月。クボタショック以前のこと、当時はまだまだ中皮腫という病名も広く知られていなかった。

1937年生まれのAさんは、1957年6月、耐熱パイプの製造などを行う地元の富士化工株式会社に入社。当時稼働して間もなかった工場では、フジパイプという耐熱性の製品を石綿を紙状にしてポリエステルを染み込ませ、芯になる鉄棒に巻き付け厚みを調整

してパイプに仕上げ、生産していた。Aさんは、粉じんを真っ白になりながら、綿状の石綿を手でほぐす解綿工程の作業に1年従事し、さらに2年ほど、旋盤で切り粉が舞う作業環境のなかで、固まったパイプの耳切工程を担当していた。その後、事務職にも配属されたが、1961年には退職。以降は、いくつかの会社で配線、配管作業や防災機器の配線などの仕事に従事し、独立して自営で働いてこられた。

2004年1月、かぜがいつまでも

治らず、息苦しいと受診したことをきっかけに、精密検査を受け、悪性中皮腫と診断された。当時、静岡の自宅でご本人から職歴をうかがい、3年あまり、アスベスト製品の製造加工に労働者として従事し、石綿に曝露したとして労災申請した。労災はすぐに認められたものの、お会いして数か月後の2004年9月に逝去された。

2014年10月大阪・泉南アスベスト国賠訴訟の最高裁判決とそれを受けての厚生労働大臣談話、翌年1月の全面和解によっ

て、国が石綿工場の元労働者や遺族に対する和解手続により賠償金の支払いをするいわゆる「泉南型石綿国賠訴訟」が可能となった。

Aさんのケースが訴訟対象に当たるのではないかと、昨年久しぶりに連絡をとり、奥さんと息子さん2名が原告となって、2017年6月静岡地裁への提訴となった。静岡初の国賠ケースとして、今後

も支援していきたい。
(東京労働安全衛生センター
内田正子)

を続けているが、いまだ会社側に安全意識が欠如していて、調査は国にまかせきりで独自の検証はまったく行っていないという。田中さんは、会社の開き直った態度に「呆れを通り越して尊敬しています」と締めくくった。

記念講演は大阪市立大学院の鰐淵秀樹教授による「職業と化学発がん」だった。がん発症のメカニズムなどを、わかりやすく説明するものだった。

また、三星化学の田中さんの報告に続いて、新日本理化学株式会社徳島工場の退職者にもオルトトルイジンによる膀胱がんの発症者がいたとの報告があった。それをきっかけに徳島で結成された「職業がんたたかうオルトトルイジンの会」が、被災者を捜し出したことから退職者20名で会を結成した経緯を話した。

その他、各地の取り組みが報告され、集会の最後に、さらなる運動の前進を誓って閉会した。

(関西労働者安全センター)

第4回職業がんなくそう集会

大阪●徳島の工場で退職者が会を結成

2017年7月9日、大阪PLP会館で「第4回職業がんなくそう集会」が開かれた。「職業がんをなくす患者と家族の会」が主催で、同時に同会の総会も行われた。

本誌で以前の集会についても紹介してきたが、「職業がんをなくす患者と家族の会」は2016年6月11日に大阪で結成された。活動の中心を担う化学一般労組は、2015年に発覚した福井県の三星化学工業株式会社での膀胱がん多発事件の労働者を支援している。

この日三星化学の労働者で、化学一般労組三星化学工業支部書記長の田中康博さんから、その後の経過報告があった。

40名程度の職場であるにもか

かわらず、現職6名、退職者3名が膀胱がんを発症している。組合は、膀胱がんの原因追及と職場環境改善のために団体交渉

登録日雇港湾労働者が提訴

兵庫●アスベスト被害の企業補償求め

日本ではアスベストのほとんどを輸入に頼ってきた。1960年代初めに10万トンを超え、1974年に352,000トンの最高を記録した。日本の輸入がピークだった1970年代は、全輸入量の約3分の1が神戸港に荷揚げされていた。その

ため、水際に荷役作業に従事した労働者だけでなく、検数作業や倉庫作業に従事した労働者へと被害がひろがっている。厚生労働省が公表した(2016年12月20日分)石綿による労災認定者数は、神戸港関連で労災保険が